

要旨

現代日本社会において、どれだけの人々が自分たちの置かれている状況・社会そのものに対して疑問を抱いているのだろうか。貧富の差・野宿者問題・雇用など、日本社会で起きている様々な問題や事件には目を向けることもなく、自分自身の日常生活にただ埋もれて生きている人々が大勢いるように見える。与えられた知識だけを受動的に暗記し、言われたことをその通りに行動するように教え込まれる学校教育の過程で、大抵の日本人は自分自身がおかれている現実や問題の本質に気づくことができないのである。このような現代の日本人には、自分自身が置かれている状況を批判的に捉え、その問題に対して主体的に取り組む姿勢が必要であると考え。そこで、ブラジルの教育論者のパウロ・フレイレの思想そして教育法を参考にし、抑圧状況からの解放のための「意識化」の重要性そして必要性を述べていく。フレイレは、抑圧状況を「抑圧者と被抑圧者の両者が非人間化された状況」と定義している。この状況から抜け出すためには、対話を中心とした被抑圧者の意識化が不可欠である。意識化することによって、自分たちが置かれている状況を批判的に捉えることができるようになり、それが抑圧された社会に対して変革へ向かう力へと向かうのである。そこでフレイレは、抑圧状況からの解放の唯一の手段であるとする「課題提起型教育法」を提唱した。この教育法は成人識字教育に代表され、非識字者も多く存在し革命も頻繁に起こった 1960 年代以降のブラジルやその周辺国で実践された。しかし日本における学校教育は、「課題提起型教育」に対して、フレイレが批判した「銀行預金型教育」に代表され、その教育法が日本の抑圧状況をますます助長している。人間として豊かに生きていくための「意識化」という面は、現在の日本の学校教育だけでなく日本社会の中で忘れられており、考え直さなければならないことである。この論文ではフレイレの思想・教育法を紹介していくことで、現代日本社会に欠けている人間の「意識化」の必要性を見直し、それを実践するためにできることを模索する。

本稿の構成は以下の通りである。第一章では、パウロ・フレイレの人生、また活動歴を紹介することで、彼がどのように教育法を導き出すに至ったかを述べる。第二章では、フレイレの代表的著作である『被抑圧者の教育学』を参考にして、フレイレの思想、抑圧からの解放のプロセス、また具体的な教育法を紹介する。第三章では日本社会に立ち戻り、日本における抑圧状況を概観し、フレイレの「意識化」をどのように日本社会に適用できるかを模索していく。

主な参考文献

Paulo Freire (1979) 「被抑圧者の教育学」小沢有作 楠原彰 柿沼秀雄 伊藤周訳、
亜紀書房。

Paulo Freire (2001) 『希望の教育学』里見実訳、太郎次郎社。